

錫杖の演武の練習の様子=いずれも板橋区で



あまり知られていないが、少林寺拳法には棒を使って戦う「武器術」もある。高弟のみに伝わったこの技を練習する「東京錫杖研究会」も数年前に誕生した。7月16日に東京武道館で開催される少林寺拳法東京都大会（東京都少林寺拳法連盟主催、東京新聞後援）の最後の種目では、研究会の約30人が錫杖組演武を披露する。本番を前に、その練習風景を見てきた。

## 実は「武器術」もあるんです

東京錫杖研究会の鈴木秀孝さん

### 高弟のみに伝わる技

板橋区の体育館で今月行われた東京錫杖研究会なる秘密の練習会に潜入した。錫杖とは、遊行僧が携帯する杖。これが、緊急時に武器になる。少林寺拳法の技法として、突きと蹴りの「剛法」に、立ち関節技、投げを駆使する「柔法」がある。しかし、これに加え、百八十寸の錫杖や六十寸の如意棒を使う「武器術」もあるのだという。

体育館では、鈴木秀孝八段（も）が出迎えてくれた。小柄で物腰は柔らかいが、眼光は鋭い。八年前、同研究会を立ち上げた一人である。十五歳で少林寺拳法を

短い如意棒と長い錫杖で演武の練習をする東京錫杖研究会



鈴木さんが口伝をまとめた錫杖の技術のテキスト。門外秘でコピー不可だ



「入門時、先輩に錫杖を

### 来月16日に都大会 30人が演武

見せてもらって、すごいなあと見とれたもんだけど、道場で教えられることはなかった。剛法や柔法は、教範もあるし、系統立てて教えられた。錫杖には、それがない。生前、開祖・宗道臣が、積極的に推奨しなかった」

少林寺拳法は徒手空拳で戦うもの。武器術は「こういふものもあるよ」と余技として高弟に伝えたのが実情という。

「演武やお祝い事で披露されることはあったが、できる人が少なくなってきた。このままだと、貴重な技術がなくなる。ボクもいつの世からお迎えが来るかわからない」との危機感から分藤秀明七段とともに研究会を立ち上げた。しかし、文章も写真もない。開祖から直々に教わった高弟たちに聞いたり、訪ねたりして数年かけてテキストにまとめた。

何かあれば折りたたみ傘でも戦える。無理なくできるので女性の護身にも最適だという。

参加者の中には女性の姿も

「実戦では、関節や急所を狙います。突く、振る、打つ。この三つが基本。突けば、ヤリの如く。振れば、なぎなたの如く。打てば、刀の如くという言葉が、棒術の世界にあります。また、錫杖をやると、剛法、柔法の体さばきに生きてきます」

練習会では、少林寺拳法発祥の地・香川県の、直島出身の故・上田清さんの演武も上映された。上田さんは終戦の年、海岸に漂着した弾薬が突然爆発して、左腕を失ったが、工夫を重ねて、オリジナルの錫杖術を作り上げた伝説の人。苦難を乗り越えた人生も感じられ、その動きは重厚で、どこか美しく、魅入ってしまった映像であった。

武器術は使いようによっては、相手に大げなさせられる。だから開祖は、広く教えることを躊躇し、高弟のみ伝えたのだらう。その思想が正しく受け継がれる限り、東京錫杖研究会の試みを、天国の開祖も喜んでるはずである。



TOYO KYO

文・竹下陽二  
写真・内山田正夫  
紙面構成・岡本恵里子

東京都大会は小学生からシニアまで約二百人が集い、日頃研磨してきた技を競い合う。成績優秀者は、十月七、八日に日本武道館で開催される世界大会に出場する。